

司祭不在のときの

# 主日の集会祭儀

「教会の祈り」による式次第  
ことばの祭儀による式次第

カトリック大阪教区  
(試用版)

# 目 次

はじめに（池長潤大司教のことば）	2
集会祭儀を行うにあたっての留意点	5
「教会の祈り」による式次第	9
詩編配分 第一主日	18
詩編配分 第二主日	25
詩編配分 第三主日	34
詩編配分 第四主日	42
ことばの祭儀による式次第	51
「司祭不在のときの主日の集会祭儀指針」	61
あとがき	75

## はじめに

教皇庁は、「ミサに参加できない信者たちが聖体拝領によって、キリストとミサの中でささげられるそのいけにえに一致できるようにする」ためにカトリック儀式書「ミサ以外のときの聖体拝領と聖体礼拝」を一九七三年に、「主日のキリスト者の祭儀をあらゆる状況のもとで保証する」ために「司祭不在のときの主日の集会祭儀指針」を一九八八年に、それぞれ発行しました。

日曜日は主の日であり、神の民が主を賛美し、主に感謝し、主を礼拝する日です。主日の本来の祭儀はミサであり、ミサの貴さとその恵みの偉大さと言うまでもありません。しかし一人の司祭が、主日に、いくつもの小教区をかけ持ちし、三回も四回もミサをささげて回るのは不自然であり、非人間的です。そういう場合、司祭によって一つの教区でミサがささげられ、他のところではこのミサへの霊的な一致のうちに信徒による集会祭儀が行われ、それらの小教区の信徒は神の民として集会祭儀に参加し、主の日を心から祝うことができるように、教皇庁は配慮してくださったのです。私は、これらの儀式書や指針に基づいて、「司祭不在のときの主日の集会祭儀」を信徒に担っていただくための教区指針を一九九七年に発表いたしました。

その後、各地で、養成コースを修了した上で小教区主任司祭から任命された信徒が、この集会祭儀をとり行うようになりました。ところが実践が広がるにつれ、集会祭儀に対する理解が地区によって違っていることが目立つようになり、さまざまな問題点も指摘されるようになりました。

それらを調整・是正するために作成したのが、ここにお届けする「集会祭儀を行うにあたっての留意点」を添えた「司祭不在のときの主日の集会祭儀」式次第です。実際に使用できる例として、①『教会の祈り』による式次第と②「ことばの典礼による式次第」という2種類の範例を提示しています。これからの主日における集会祭儀では、お配りするこの式次第を参考にして、ふさわしい実施がなされるよう配慮してください。

これらのことを前提にした上で、私は、三つのお願いを付加いたします。

まず第一に、このような留意事項と範例をお送りするのは、皆様の積極的な発想や創意を抑えるためでは決してありません。ふさわしい集会祭儀のあり方をよく理解して頂いた上で、よりいっそう豊かな内容の祭儀となるように創意工夫してくださることを期待しています。この

ようにしたら祈りが深まった、あそこに手を加えたら心を合わせて賛美することができたといった実践例や工夫例が届けられるのをお待ちしております。今回お届けするのは試用版です。数年後に、各小教区での皆様の貴重な体験をふまえて規範版を作成する予定です。

第二に、この「司祭不在のときの主日の集会祭儀」式次第は日本人のためだけのものではありません。日本語による式次第に「ふりがな」を付けたのは、ひらがなを読むことができれば、国籍に関係なく、ともに主を賛美し、ともに主の日を祝うことができるだろうと考えたからです。また、大急ぎで英語とスペイン語とポルトガル語による式次第の準備を進めていることもお知らせいたします。

第三に、ミサの卓越した意味と主日の重大な意義との両方を見失わないように心からお願いいたします。「ミサに代わる祭儀などありえない。だから司祭の手が十分にまわらないからといって、信徒が司式する集会祭儀など行う必要はない」という発言を耳にしたことがあります。このような考え方は正しくありません。たとえ司祭がいなくとも、主日には、神を賛美するために共同体として集まる意味が大いにあります。そして共同体の中で、たとえ信徒の手から配られるとしても、聖体に参与することには、はかり知れない価値があります。共同体としての一致と、神への賛美にこの集会をささげるのです。

共同体として兄弟姉妹が結ばれることと、共同体において神に仕え神を賛美することは、主日だけではなく、平日のいろいろな集まりの機会にも求められます。研究会や、分ち合いの機会に、またグループとして何かの活動をする機会には、自由な祈りの形によって神に心を向けていきましょう。この種の実践に親しんでいけばいくほど、主日の集会祭儀も、自由な心から生み出された祈りと賛美が深まっていくことでしょう。大阪教区が、絶えず祈る共同体として育ててゆくことを心から願ってやみません。

## 集会祭儀を行うにあたっての留意点

### 【集会祭儀司式者の任命】

小教区（ブロック）担当司祭は、小教区評議会や小教区典礼委員会などと相談した上、「集会祭儀司式者養成コース」を修了した者の中から「集会祭儀司式者」を任命する。

集会祭儀司式者について小教区共同体全体の理解を得るために、主日の「感謝の祭儀（ミサ）」の中で「司祭不在のときの主日の集会祭儀」について説明し、『カトリック儀式書 ミサ以外のときの聖体拝領と聖体礼拝』（110頁）「付録一 聖体奉仕者の任命式」を参考にしつつ任命式を行うことが勧められる。

集会祭儀司式者の任期は、一期三年。原則として任命された小教区（ブロック）で奉仕する。集会祭儀が行われる他の小教区（ブロック）担当司祭から明確な依頼があれば、そこに行って司式奉仕することもできる。更新する場合は、必ずワークショップ等に参加のこと（第46回司祭評議会決議参照）。

### 【奉仕者とその役割】

「指名を受けた信徒は、ゆだねられた任務が名誉であるよりは、むしろ、使命であること、なによりもまず、主任司祭の権威のもとで行う、兄弟への奉仕であることを自覚しなければならない。その任務は、本来彼らに属するものではなく、『役務者が不在のため、教会が必要とする場合に』果たす、補助的なものなのである」（『カトリック儀式書 ミサ以外のときの聖体拝領と聖体礼拝』「司祭不在のときの主日の集会祭儀指針」31。以下「集会祭儀指針」と略）。

- ① 集会祭儀司式者： 司祭不在のとき、主日の集会祭儀全体に責任をもって奉仕する。すなわち「祈りを指導し、ことばの祭儀を司式し、聖体を配る」（集会祭儀指針 30）。ただし「会衆と平等な立場にある者として振る舞う。…司祭や助祭に保留されている言いまわしを用いてはならず、明らかにミサを直接連想させる儀式、例えばあいさつ、

特に『主は皆さんとともに』や、司会者の信徒が、役務者と混同されるような派遣のことばは省く」（『集会祭儀指針』39）。

- ② 聖体奉仕者： 聖別されたパンの入った容器（ピクシス）を聖櫃から取り出し、聖体の一片を拝領者に示して、「キリストのからだ」と言って授ける。聖別されたパンが残った場合は、聖櫃に戻す。  
原則として、集会祭儀司式者の任命を受けている者が担当。拝領者の人数に応じて複数で奉仕。時には、集会祭儀司式者の任命を受けていない者でも、小教区（ブロック）担当司祭から期間・場所の限定条件つきで聖体奉仕者に選任されることがある。
- ③ 任命を必要としない奉仕者： 先唱者、朗読者、詩編唱者、オルガン奏者、聖歌隊、共同祈願代読者、献金係、受付・案内係、香部屋係等。これらの奉仕職は、受洗者であれば、小教区（ブロック）担当司祭からの特別な任命がなくとも果たすことができる。

### 【集会祭儀司式者および聖体奉仕者の服装】

「服装は、この奉仕にふさわしいものを着用するか、あるいは司教によって定められた式服がある場合にはこれを着用する」（『集会祭儀指針』39）。大阪教区としては特に式服を定めない。ただし集会祭儀司式者および聖体奉仕者共通の「しるし」として、十字架を首からさげることことを奨励する。

### 【集会祭儀の準備】

- ① 主日における司祭不在の集会祭儀を実施する前にその都度、集会祭儀司式者・聖体奉仕者およびその他の関係者は、司祭と共に事前準備を行う。
- ② まず、司祭不在の集会祭儀が行われる予定の主日の福音を味わい、分かち合う。その上で勧めの言葉や共同祈願の準備、式次第の確認、役割分担、使用する聖歌などを決める。
- ③ 担当者への一任は可能な限り避ける。

### 【奉仕者の席】

- ① 集会祭儀司式者も聖体奉仕者も、「感謝の祭儀（ミサ）」における司式司祭の座席は使用しない（『集会祭儀指針』40参照）。
- ② 「司祭および助祭が不在の場合、『教会の祈り』を司式する人は一般の信者と同列であって司祭席に着かない」（『教会の祈り』『教会の祈りの総則』258）。
- ③ 「朗読台からは、聖書朗読が行われ、答唱詩編および復活賛歌が唱えられる。さらに説教、および共同祈願すなわち信者の祈りを行うことができる。しかし解説者、先唱者、もしくは聖歌隊の指揮者が朗読台に立つことは、あまりふさわしいことではない」（『ローマ・ミサ典礼書の総則』272。以下「ミサ総則」と略。）
- ④ 「祭壇は奉献と過越の宴の食卓であるから、聖体の分配に先立って聖別されたパンを置くためにのみ用いる」（『集会祭儀指針』40）。

### 【献金について】

- ① 献金は、原則として通常している時と方法に準じる。通常、ミサ前に聖堂入り口で献金を集めている場合は、同じように集会祭儀の前に聖堂入り口で集める。共同祈願の後にかごを回して集めている場合は、同じように共同祈願の後にかごを回して集める。聖体拝領後、感謝の祈りとしてザカリアの歌やマリアの歌などを歌っている間に献金を集めることもできる。
- ② ただし奉納行列は行わないので、集めた献金の置く場所を工夫すること。「感謝の祭儀（ミサ）」における奉納を思い起こさせる方法（司式者への手渡しなど）は避ける。

# 司祭不在のときの主日の集会祭儀

— 『教会の祈り』による式次第 —

## 開祭<sup>1</sup>

第一形式	第二形式
<b>初め</b> (起立) <b>司式者</b> 神よ、わたしを力づけ <sup>2</sup> 、 <b>一同</b> 急いで助けに来てください。 <b>司式者</b> 栄光は父と子と聖霊に。 <b>一同</b> 初めのように 今も いつも 世々に。アーメン。 アレルヤ (四旬節には省く)。  <b>賛歌</b>	<b>入祭の歌</b> (起立)  <b>あいさつ</b> <b>司式者</b> 父と子と聖霊のみ名によって。 <b>一同</b> アーメン。 <b>司式者</b> 主イエス・キリストの恵みと喜び が わたしたちを力づけてくだ さいますように。 <b>一同</b> アーメン。

## 第一唱和<sup>3</sup> (着席)

## 第二唱和

## 第三唱和

## 集会祈願<sup>4</sup> (起立)

<sup>1</sup> 先唱者は、①これから始まる祭儀が「感謝の祭儀 (ミサ)」ではなく、「司祭不在の集会祭儀」であることを通知し、②小教区担当司祭がどの共同体において「感謝の祭儀」を執り行うかを知らせ、霊的にその共同体と一致するよう一同にすすめ、③その主日を簡単に紹介する(「復活節第二主日」といった典礼暦における位置づけや「召命祈願日」といった特別な意向など)。

立ったり座ったりする合図やお知らせ、聖歌番号などは先唱者が担当し、司式者は祈りの言葉のみを口にするよう役割分担する。

司式者は、信者席の最前列で、ほかの信者と同じ方向を向いたまま「教会の祈り」を司式する。司式者と侍者が荘厳に入堂するような形式は避ける。

<sup>2</sup> 「神よ、わたしを力づけ…」を唱えつつ、各自、十字架のしるしをする。典礼聖歌 362 を使用して歌うことが勧められる。

<sup>3</sup> 第一唱和から第三唱和の例が 18 頁以降にある。便宜上、第一主日から第四主日の 4 種類から選ぶようになっている。事情が許せば、カトリック中央協議会発行『教会の祈り』を使用することが勧められる。

<sup>4</sup> 当日のミサの集会祈願を用いることが勧められる。

**司式者** 祈りましょう（一同しばらく沈黙のうちに祈る）  
.....  
わたしたちの主イエス・キリストによって。  
**一同** アーメン。

## ことばの典礼<sup>5</sup>

**第一朗読**（着席）

**答唱詩編**

**第二朗読**

**アレルヤ唱**（四句節には詠唱）（起立）

**福音朗読**<sup>6</sup>（朗読の後、全員着席し、しばらく沈黙のうちに神のことばを味わう）

**勧めのことば**<sup>7</sup>

**信仰宣言**（起立）

---

<sup>5</sup> 当日のミサの朗読箇所が勧められる。事情によっては第一朗読と第二朗読のいずれかを省くことができる。答唱詩編とアレルヤ唱は、朗読箇所に合ったものを選んで歌う。沈黙の祈りをもって代えることもできる。

<sup>6</sup> 朗読者が信徒であれば、「主は皆さんとともに」を省き、「(マタイ)による福音」から始める。

<sup>7</sup> 説教をするのは、司教、司祭、助祭の役割である。司教、司祭、助祭が不在の場合、事前に司祭または助祭とともに集会祭儀準備会をもち、「司祭不在の集会祭儀」参加者が神のことばを心に刻むことができるように打ち合わせをする。以下のようなひとときを過ごす可能性がある。  
①今日、私たちに語られた「神のことば」を黙想する時間をもつ（例えば、沈黙のうちに各自、福音を読み返し、味わったり、心に響いたことばを書き出したりするように勧める）。②集会祭儀準備会における「福音の分かち合い」での気づきや信仰の喜びを、準備会参加者が「証し」あるいは「勧めのことば」として発表する。③小教区（ブロック）担当司祭が準備した説教を朗読する。④当日の典礼や福音を解説するテキストを朗読する。⑤その場で「福音の分かち合い」をする。ただし「神の啓示を聴き応答する」という典礼本来の目的から逸れないように注意し、「分かち合い」の実りが祈りとなるように配慮する（例えば、「分かち合い」をした各グループの代表が共同祈願の形で祈りを捧げるようにする。「分かち合い」そのものに関する配慮や説明は、『新生の明日を求めて』130-136頁、226-230頁参照のこと）。

ニケア・コンスタンチノーブル信条	使徒信条	洗礼式の信仰宣言
<p>われは信ず、唯一の神、全能の父、天と地、見ゆるもの、見えざるもの、すべての造り主を。 われは信ず、唯一の主、神の御ひとり子、イエス・キリストを。 主はよらず世のさきに、父より生まれ、神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神。 造られずして生まれ、父と一体なり、すべては主によりて造られたり。 主はわれら人類のため、また、われらの救いのために天よりくだり、聖霊によりて、おとめマリアより御からだを受け、人となりたまえり。 ポンシオ・ピラトのもとにて、われらのために十字架につけられ、苦しみを受け、葬られたまえり。 聖書にありしごとく、三日目によみがえり、天ののぼりて、父の右に座したもう。 主は栄光のうちに再び来たり、生ける人と死せる人とを裁きたもう、主の国は終わることなし。 われは信ず、主なる聖霊、生命の与え主を。 聖霊は父と子とよりいで、父と子とともに拝みあがめられ、また預言者によりて語りたまえり。 われは一、聖、公、使徒継承の教会を信じ、罪のゆるしのためなる唯一の洗礼を認め、死者のよみがえりと、来世の生命とを待ち望む。アーメン。</p>	<p>天地の創造主、全能の神である父を信じます。父のひとり子、わたしたちの主イエス・キリストを信じます。主は聖霊によって人となり、おとめマリアから生まれ、ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられて死に、葬られ、死者のもとに下り、三日目に復活し、天に上って、全能の神である父の右の座に着き、生者と死者を裁くために来られます。聖霊を信じ、聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます。アーメン。</p>	<p>天地の創造主、全能の神である父を信じます。父のひとり子、おとめマリアから生まれ、苦しみを受けて葬られ、死者のうちから復活して、父の右におられる主イエス・キリストを信じます。聖霊を信じ、聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます。</p>

## 共同祈願<sup>8</sup>

### 交わりの儀<sup>9</sup>

#### 主の祈り（次のようなことばで一同を「主の祈り」に招く）

- 司式者** 神のことばで養われたわたしたちは、今、主の食卓にあずかるよう招かれています。主のからだをいただく前に心を合わせて主の祈りを唱えましょう。
- 一同** 天におられるわたしたちの父よ、み名が聖とされますように。み国が来ますように。みこころが天に行われるとおりに地にも行われますように。わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします。わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください。
- 司式者** いつくしみ深い父よ、すべての悪からわたしたちを救い、キリストの平和をお与えください。
- 一同** アーメン。

#### 平和のあいさつ<sup>10</sup>

<sup>8</sup> 共同祈願の意向：①教会とその使命のため、②全世界の救いと国政に携わる人のため、③困難に苦しむ人のため、④自分たちの共同体のためなど。教区長の出した教区全体のための意向、司祭召命のための意向も加える。当日の『聖書と典礼』共同祈願例文を使用することもできる。

<sup>9</sup> 奉仕者は、手を洗い、祭壇の上にコルポラーレを広げる。聖櫃を開けて一礼し、聖体の器を取り出し、祭壇の上に置く。ふたをとり、聖体に対して深く礼をする。

<sup>10</sup> ここで平和のあいさつを交わすこともできる。一同は「主の平和」と言いながら相互にあい

**司式者** 互いに平和のあいさつを交わしましょう。

### 拝領前の信仰告白<sup>11</sup>

	第一形式		第二形式
<b>司式者</b>	神の小羊の食卓に招かれた者は幸い。	<b>司式者</b>	信仰のうちにキリストのからだを受けましょう。
<b>一同</b>	主よ、あなたは神の子キリスト、永遠のいのちの糧、あなたをおいてだれのところに行きましょう。	<b>一同</b>	主よ、わたしは いたらぬ者です。一言でもいただければ、わたしの心はいやされます。

### 拝領<sup>12</sup>

**聖体奉仕者** キリストのからだ。

**拝領者** アーメン。

### 感謝の祈り<sup>13</sup>（ザカリアの歌、マリアの歌など）

### 拝領祈願<sup>14</sup>

さつをする。

<sup>11</sup> 司式者は深く礼をしてから、パテナを添えてパンを捧持し、一同に示して言う。

<sup>12</sup> ① 拝領前の信仰告白の後、拝領の歌が始まる。拝領者は行列をつくる。

② 聖体奉仕者は拝領者一人ひとりにパンを示しながら「キリストのからだ」と言うことによって信仰告白を求める。信者は明確に「アーメン」と答えることで、キリストのからだを拝領することによってますますキリストのからだとなる決意を表明する。聖体奉仕者は、拝領者が「アーメン」と答えたのを確認してから授ける。

③ カトリック教会の洗礼を受けていない人や初聖体前の子どもが並んでいる場合、聖体奉仕者は、祝福をともに祈ることができる。例えば、聖体容器を持っていない方の手を自分の胸にあて、軽く頭を下げつつ「キリストの祝福がありますように」と祈る。

④ 聖体奉仕者は、一同に聖体を授け終わってから、最後に司式者または他の聖体奉仕者から拝領する。

⑤ 拝領後、パンの小片が残っている場合は、ていねいにそれを集めて聖体容器に入れるか、用意された器の水に浮かせて飲み、プリフィカトリウムでふく。

⑥ 聖体奉仕者は、残りのパンを聖櫃に納め、深く礼をしてから扉を閉じる。その後、着席して一同とともにしばらく沈黙のうちに祈る。

<sup>13</sup> 拝領後の短い黙想の後、集会祭儀司式者は、他の信者ととともに祭壇の方に向かって立ち、神の栄光といつくしみをたたえるために「福音の歌」を歌う（午前なら典礼聖歌 83「神をほめたたえよ」、午後なら典礼聖歌 178「わたしは神をあがめ」など）。詩編を歌うこともできる（典礼聖歌 22, 27, 29, 50, 109, 135, 142, 172, 174 など）。

<sup>14</sup> 司式者はこのようなことばで一同を祈りに招く。祈願は当日のミサの拝領祈願を用いることが勧められる。ただし当日の拝領祈願の中にミサ固有の表現が含まれている場合（例えば、「主の晩さん（主の過越）にあずかったわたしたち」、「一つのパン、一つの杯（主の御からだと御血）をいただいたわたしたち」など）は、以下の祈りを用いることが勧められる。

① 「恵み豊かな父よ、あなたはわたしたちを、死んで復活されたイエス・キリストの記念にお

**司式者** 秘跡の恵みを感謝して祈りましょう（一同しばらく沈黙のうちに祈る）

.....

わたしたちの主イエス・キリストによって。

**一同** アーメン。

## 閉祭

**お知らせ**（着席）

**結びの祈り**<sup>15</sup>（起立）

**司式者** 全能の神、父と子と聖霊がわたしたちを祝福し、すべての悪から守り、永遠のいのちに導いてくださいますように。

**一同** アーメン。

**司式者** 賛美と感謝のうちに。

**一同** アーメン。

## 結びの歌

---

集めになり、御子のために聖化された主の日を祝うようにしていただきました。どうかわたしたちを、キリストのことばに従って生きる証し人にしてください。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。」

②「豊かないのちを与えてくださる神よ、福音に強められ、聖体に養われた民の歩みを導いてください。キリストによってもたらされた神の国の幸いを、日々出会う人々とともに味わうことができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。」

<sup>15</sup> 集会祭儀司式者は、一同の上に神の祝福を求め、皆とともに自分自身に十字架のしるしをしながら言う。

## 詩編配分 第一主日

### 第一唱和<sup>16</sup>

詩編 63(2-9)神を慕う心<sup>17</sup>

かわいている者は、わたしのところに来て飲みなさい (ヨハネ 7・37)

**先唱者** あなたの力と栄えにあこがれて、  
神よ、わたしはあなたを慕う アレルヤ。

---

(待降節、四旬節に)

**先唱者** いのちある限り、あなたに感謝し、  
あなたの名を呼び求める アレルヤ。

---

神よ、わたしの神よ、わたしは あなたを慕う。  
水のない荒れ果てた土地のように、  
わたしの心は あなたを慕い、  
からだは あなたをかわき求める。

あなたの力と栄えにあこがれて、  
聖所で あなたを仰ぎ見る。  
あなたの恵みは いのちにまさり、  
わたしの口は あなたをたたえる。

いのちのある限り、あなたに感謝し、  
手を高く上げて あなたの名を呼び求める。  
もてなしを受けた時のように、  
わたしの心は豊かになり、  
口には喜びの歌がのぼる。

床の中で あなたを思い起こし、  
夜どおし、あなたのことを思う。  
あなたは わたしの助け。  
あなたの翼のかげに わたしは隠れる。

わたしの心は あなたにたより、  
あなたの右の手は わたしをささえる。

栄光は父と子と聖霊に。  
初めのように 今も いつも 世々に。アーメン。

### 第二唱和

旧約の歌 (ダニエル 3・57-88 56)

---

<sup>16</sup> 詩編は、典礼聖歌 363 を参考にして歌うことができる。祭壇に向かって右側と左側とが交替して歌えるよう、四行または六行ごとに段落を区切り、音の変わるところには下線を付けている。『典礼聖歌』巻末の「詩編索引」を利用して、該当する詩編を使用している典礼聖歌を歌うこともできる。

<sup>17</sup> 詩編の表題（「詩編 63(2-9)神を慕う心」の部分）と、新約聖書の一節（「かわいている者は、わたしのところに来て飲みなさい (ヨハネ 7・37)」の部分）は、信者の生活にとってそれぞれの詩編がもつ意味と重要性を示すものなので、各自、沈黙のうちに味わう。

## すべてのものは神をたたえる

神のすべてのしもべよ、わたしたちの神を賛美せよ（黙示録 19・5b）

**先唱者** 神よ、あなたは すべてにまさり、  
代々に ほめたたえられる アレルヤ。

造られたものは みな神を賛美し、  
代々に神をほめたたえよ。  
天のすべてのものは神を賛美し、  
神の使いは神をたたえよ。

空の上の水は みな神を賛美し、  
天のすべての力は神をたたえよ。  
太陽と月は神を賛美し、  
空の星は神をたたえよ。

雨と露は神を賛美し、  
すべての風は神をたたえよ。  
火と暑さは神を賛美し、  
冬の厳しさも神をたたえよ。

かすみと きりは神を賛美し、  
霜と寒さも神をたたえよ。  
氷と雪は神を賛美し、  
夜も昼も神をたたえよ。

光と やみは神を賛美し、  
いなずまと雲は神をたたえよ。  
大地は神を賛美し、  
代々に神をほめたたえよ。

山と丘は神を賛美し、  
地に はえる草木は神をたたえよ。  
泉の水は神を賛美し、  
海も川も神をたたえよ。

海のけもの、水に住む生き物は神を賛美し、  
空の鳥は神をたたえよ。  
野のけものと家畜は神を賛美し、  
すべての人は神をたたえよ。

イスラエルは神を賛美し、  
代々に神をほめたたえよ。  
神の祭司は神を賛美し、  
神のしもべは神をたたえよ。

神に従う人は神を賛美し、  
神を敬い、へりくだる人は神をたたえよ。  
アナニア、アサリア、ミサエルは神を賛美し、  
代々に神をほめたたえよ。

賛美は父と子と聖霊に、

代々に神をほめたたえよう。  
神よ、高い大空の中で あなたは賛美され、  
すべてにまさり、代々にほめたたえられる。

### 第三唱和

#### 詩編 149 民のつどいの喜び

最後まで、わたしのわざを守る人には、諸国の民を支配する権能を授けよう（黙示録 2・26）

**先唱者** シオンの子らは その王を喜び アレルヤ。

---

（待降節、降誕節、四旬節に）

**先唱者** 神は その民を心に留め、  
貧しい人を勝利で餽られる アレルヤ。

---

新しい歌を神に歌い、  
民のつどいで神を賛美しよう。  
イスラエルは その造り主を喜び、  
シオンの子らは その王を喜べ。

舞をささげて神の名をほめ、  
鼓と琴に合わせて神をたたえよ。  
神は その民を心に留め、  
貧しい人を勝利で餽られる。

栄光をあびて神の民は喜び、  
神に仕え、高らかに歌う。  
かれらの口には神への賛美、  
手には鋭い剣がある。

諸国は その報いを受け、その民は しずめられ、  
王はくさりで、諸侯は かせでつながれる。  
定められた さばきを果たすこと、  
これは神を敬う人の蒼れ。

栄光は父と子と聖霊に。  
初めのように 今も いつも 世々に。アーメン。

## 詩編配分 第二主日

### 第一唱和

詩編 118 救いのわざを感謝して

「家造りの捨てた石が、もっともたいせつな石となった」と言われているのは、このかたのこと（使徒言行録4・11）

**先唱者** 神の名によって集まる人に神の祝福  
アレルヤ。

---

(季節に)

**先唱者** 神の右の手は力を示す アレルヤ。

---

神に感謝せよ。  
神はいつくしみ深く、そのあわれみは永遠。  
イスラエルよ、叫べ。  
「神のいつくしみは永遠。」

アロンの家よ、叫べ。  
「神のいつくしみは永遠。」  
神をおそれる者よ、叫べ。  
「神のいつくしみは永遠。」

苦悩のさなかで神に助けを求めると、  
神はこたえて わたしを広い所に移された。  
神は わたしのささえ、  
わたしは恐れることがない。  
だれも わたしに手をくだせない。  
神は わたしのささえ、わたしの助け。  
わたしは はむかう者を ものともしない。

人の力をあてにするより、  
心から神に信頼しよう。  
支配する者に すがりより、  
心から神に信頼しよう。

すべての国に囲まれたのに、  
神の力によって、わたしは かれらを打ち砕いた。  
四方から取り囲まれていたのに、  
神の力によって かれらを打ち砕いた。

かれらは はちのように わたしを囲み、  
いばらの火のように燃えあがったのに、  
わたしは神の力によって  
かれらを打ち砕いた。

わたしが打ちのめされようとした時、  
神は わたしを助けられた。  
神は わたしの力、わたしの歌。  
神は わたしの救い。

神に従う人の幕屋には、勝利と喜びの叫び。  
「神の右の手は力を示す。  
神の右の手は高くあがり、  
その右の手は力を示す。」

わたしは死なず、わたしは生きる、  
神のわざを告げるために。  
神は わたしを責められたのに、  
死に渡そうとは されなかった。

正義の門よ、とびらを開け、  
わたしは中に はいって 神に感謝しよう。  
これは神の門、  
神に従う人は ここから はいる。  
わたしは あなたに感謝する。  
あなたは こたえて わたしを救われた。

家造りの捨てた石が、  
もっとも たいせつな石となった。  
これは神のわざ、  
人の目には不思議なこと。  
きょうこそ、神が造られた日、  
この日をともに喜び祝おう。

「神よ、救いを わたしたちに。  
神よ、しあわせを わたしたちに。」  
「神の名によって集まる人に神の祝福。  
祝福は神の家から あなたがたの上に。」

ヤーウエは わたしたちを照らしてくださる神。  
杖を携えて行列に はいり、祭壇まで進もう。  
あなたは わたしの神。  
あなたに感謝し、あなたをたたえる。

神に感謝せよ。  
神は いつくしみ深く、そのあわれみは永遠。

栄光は父と子と聖霊に。  
初めのように 今も いつも 世々に。アーメン。

## 第二唱和

旧約の歌 (ダニエル 3・52-57) すべてのものは神をたたえる  
造り主は とこしえに たたえられるべきかた (ロマ 1・25)

**先唱者** 神よ、あなたは代々にたたえられ、  
あがめられる アレルヤ。

---

(季節に)  
**先唱者** 栄光の聖なる名に賛美、  
その名は代々にあがめられる アレルヤ。

---

わたしたちの先祖の神である主よ、あなたに賛美、  
あなたは代々にたたえられ、あがめられる。  
あなたの栄光の聖なる名に賛美、  
その名は代々にたたえられ、あがめられる。

あなたの栄光、聖なる神殿の中であなたに賛美、  
すべてにまさり あなたは代々にたたえられ、  
あがめられる。  
玉座におられる あなたに賛美、  
すべてにまさり あなたは代々にたたえられ、  
あがめられる。

ケルビムの上に座し、  
すべての深みを見通される あなたに賛美。  
あなたは代々にたたえられ あがめられる。  
大空の中で あなたに賛美、  
あなたは代々にたたえられ、あがめられる。

造られたものは みな神を賛美し、  
代々に神をほめたたえよ。

栄光は父と子と聖霊に。  
初めのように 今も いつも 世々に。アーメン。

### 第三唱和

#### 詩編 150 賛美の合奏

栄光は 教会とキリスト・イエスのうちにあつて、世々、とこしえに。アーメン (エフェソ 3・21)

**先唱者** すべてを越える神をたたえよ アレルヤ。

聖所におられる神をたたえよ。  
大空にみなぎる神の力をたたえよ。  
そのわざは偉大。神をたたえよ。  
すべてを越える神をたたえよ。

角笛を吹いて神をたたえよ。  
琴を弾き、たて琴をかなでて神をたたえよ。  
鼓と舞を合わせて神をたたえよ。  
弦をかなで、笛を吹いて神をたたえよ。

高鳴るシンバルで神をたたえよ。  
鳴りひびくシンバルで神をたたえよ。  
いのちある すべてのものは  
神をたたえよ。

栄光は父と子と聖霊に。  
初めのように 今も いつも 世々に。アーメン。

## 詩編配分 第三主日

### 第一唱和

#### 詩編 93 神は世界の王

主は万物を支配され、わたしたちの神である主は 王となられた。わたしたちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう（黙示録 19・6 7）

**先唱者** 神は栄光に満ち、  
偉大な力を身に帯びておられる アレルヤ。

---

(季節に)

**先唱者** 神は世界を ゆるぎなく建て、  
そのことばは変わることがない アレルヤ。

---

神は王。栄光に満ち、  
偉大な力を身に帯びておられる。  
神は世界をゆるぎなく建て、  
とこしえに王座をすえ、永遠に座しておられる。

潮の流れは 声をあげる。  
潮の流れは どよめきの声をあげる。  
とどろく海、さかまく波にまさり、  
すべてを越える神は力強い。

神よ、あなたのことばは変わることなく、  
あなたの家は とこしえに とうとい。

栄光は父と子と聖霊に。  
初めのように 今も いつも 世々に。アーメン。

### 第二唱和

#### 旧約の歌 (ダニエル 3・57-88 56) すべてのものは神をたたえる

神のすべてのしもべよ、わたしたちの神を賛美せよ（黙示録 19・5b）

**先唱者** 三人の若者は声をそろえて神をたたえた アレルヤ。

---

(季節に)

**先唱者** 神よ、あなたは すべてにまさり、  
代々に ほめたたえられる アレルヤ。

---

造られたものは みな神を賛美し、  
代々に神を ほめたたえよ。  
天のすべてのものは神を賛美し、  
神の使いは神をたたえよ。

空の上の水は みな神を賛美し、  
天のすべての力は神をたたえよ。  
太陽と月は神を賛美し、  
空の星は神をたたえよ。

雨と露は神を賛美し、

すべての風は神をたたえよ。  
火と暑さは神を賛美し、  
冬の厳しさも神をたたえよ。

かすみと きりは神を賛美し、  
霜と寒さも神をたたえよ。  
氷と雪は神を賛美し、  
夜も昼も神をたたえよ。

光とやみは神を賛美し、  
いなずまと雲は神をたたえよ。  
大地は神を賛美し、  
代々に神をほめたたえよ。

山と丘は神を賛美し、  
地にはえる草木は神をたたえよ。  
泉の水は神を賛美し、  
海も川も神をたたえよ。

海のけもの、水に住む生き物は神を賛美し、  
空の鳥は神をたたえよ。  
野のけものと家畜は神を賛美し、  
すべての人は神をたたえよ。

イスラエルは神を賛美し、  
代々に神をほめたたえよ。  
神に仕える祭司は神を賛美し、  
神のしもべは神をたたえよ。

神に従う人は神を賛美し、  
神を敬いへりくださる人は神をたたえよ。  
アナニア、アサリア、ミサエルは神を賛美し、  
代々に神をほめたたえよ。

賛美は父と子と聖霊に、  
代々に神をほめたたえよう。  
神よ、高い大空の中で、あなたは賛美され、  
すべてにまさり、代々にほめたたえられる。

### 第三唱和

#### 詩編 148 宇宙の賛美

王座に すわるかたと小羊に、賛美と誉れ、栄光と力が代々としえに（黙示録 5・13）

**先唱者** すべてのものは神をたたえよ アレルヤ。

---

（降誕節、復活節に）

**先唱者** 神は偉大。その栄光は天地をおおう  
アレルヤ。

---

天は神をたたえよ。

天にあるすべてのものは神をたたえよ。  
神の使いは神をたたえよ。  
すべての力は神をたたえよ。

太陽と月は神をたたえよ。  
きらめく星座は神をたたえよ。  
大空は神をたたえよ。  
雲は神をたたえよ。

神のことばで造られた 天にあるすべてのものは、  
神の名をたたえよ。  
神は造られたものに おきてを与え、  
とこしえに それを定められた。

地にあるものは神をたたえよ。  
海と そこにすむものは神をたたえよ。  
いはずまと あられ、雪と霜は神をたたえよ。  
吹きすさぶ風は神をたたえよ。

山と丘は神をたたえよ。  
実を結ぶ木、すべての糸杉は神をたたえよ。  
野のけもの、すべての家畜は神をたたえよ。  
地をはうもの、翼ある鳥は神をたたえよ。

地を治める王、すべての民は神をたたえよ。  
すべての支配者は神をたたえよ。  
若者と おとめたちは神をたたえよ。  
年老いた者も、子どもたちも神をたたえよ。

すべての者は神の名をたたえよ。  
神は偉大。その栄光は天地をおおう。  
神は、その民を高められた。  
神に選ばれた民、  
イスラエルは賛美の声をあげる。

栄光は父と子と聖霊に。  
初めのように 今も いつも 世々に。アーメン。

## 詩編配分 第四主日

### 第一唱和

#### 詩編 118 救いのわざを感謝して

「家造りの捨てた石が、もっともたいせつな石となった」と言われているのは、このかたのこと（使徒言行録4・11）

**先唱者** 神に感謝せよ、そのあわれみは永遠  
アレルヤ。

---

(季節に)

**先唱者** あなたは わたしの神、  
わたしは あなたをたたえる アレルヤ。

---

神に感謝せよ。  
神は いくつしみ深く、そのあわれみは永遠。  
イスラエルよ、叫べ。  
「神のいくつしみは永遠。」

アロンの家よ、叫べ。  
「神のいくつしみは永遠。」  
神をおそれる者よ、叫べ。  
「神のいくつしみは永遠。」

苦悩のさなかで神に助けを求めると、  
神はこたえて わたしを広い所に移された。  
神は わたしのささえ、わたしは恐れることがない。  
だれも わたしに手をくだせない。  
神は わたしのささえ、わたしの助け。  
わたしは はむかう者を ものともしない。

人の力をあてにするより、  
心から神に信頼しよう。  
支配する者に すぐるより、  
心から神に信頼しよう。

すべての国に囲まれたのに、  
神の力によって、わたしは かれらを打ち砕いた。  
四方から取り囲まれていたのに、  
神の力によって かれらを打ち砕いた。

かれらは はちのように わたしを囲み、  
いばらの火のように燃えあがったのに、  
わたしは神の力によって  
かれらを打ち砕いた。

わたしが打ちのめされようとした時、  
神は わたしを助けられた。  
神は わたしの力、わたしの歌。  
神は わたしの救い。

神に従う人の幕屋には、勝利と喜びの叫び。

「神の右の手は力を示す。  
神の右の手は高くあがり、  
その右の手は力を示す。」

わたしは死なず、わたしは生きる、  
神のわざを告げるために。  
神は わたしを責められたのに、  
死に渡そうとは されなかった。

正義の門よ、とびらを開け。  
わたしは中に はいって 神に感謝しよう。  
これは神の門、  
神に従う人は ここから はいる。  
わたしは あなたに感謝する。  
あなたは こたえて わたしを救われた。

家造りの捨てた石が、  
もっとも たいせつな石となった。  
これは神のわざ、  
人の目には不思議なこと。  
きょうこそ、神が造られた日、  
この日をともに喜び祝おう。

「神よ、救いを わたしたちに。  
神よ、しあわせを わたしたちに。」  
「神の名によって集まる人に神の祝福。  
祝福は神の家から あなたがたの上に。」

ヤーウェは わたしたちを照らしてくださる神。  
枝を携えて行列に はいり、祭壇まで進もう。  
あなたは わたしの神。  
あなたに感謝し、あなたをたたえる。

神に感謝せよ。  
神は いくつしみ深く、そのあわれみは永遠。

栄光は父と子と聖霊に。  
初めのように 今も いつも 世々に。アーメン。

## 第二唱和

旧約の歌 (ダニエル 3・52-57) **すべてのものは神をたたえる**  
造り主は とこしえにたたえられるべきかた (ロマ 1・25)

**先唱者** 造られたものは みな神を賛美し、  
代々に神をほめたたえよ アレルヤ。

---

(季節に)

**先唱者** 栄光の聖なる名に賛美、  
その名は代々にあがめられる アレルヤ。

---

わたしたちの先祖の神である主よ、あなたに賛美、

あなたは代々にたたえられ、あがめられる。  
あなたの栄光の聖なる名に賛美、  
その名は代々にたたえられ、あがめられる。

あなたの栄光、聖なる神殿で あなたに賛美、  
すべてにまさり あなたは代々にたたえられ、  
あがめられる。  
玉座におられる あなたに賛美、  
すべてにまさり あなたは代々にたたえられ、  
あがめられる。

ケルビムの上に座し、  
すべての深みを見通される あなたに賛美。  
あなたは代々にたたえられ、あがめられる。  
大空の中で あなたに賛美。  
あなたは代々にたたえられ、あがめられる。

造られたものは みな神を賛美し、  
代々に神をほめたたえよ。

栄光は父と子と聖霊に。  
初めのように 今も いつも 世々に。アーメン。

### 第三唱和

#### 詩編 150 賛美の合奏

栄光は 教会とキリスト・イエスのうちにあつて、世々、とこしえに。アーメン (エフェソ 3・21)

**先唱者** いのちある すべてのもは神をたたえよ アレルヤ。

聖所におられる神をたたえよ。  
大空にみなぎる神の力をたたえよ。  
そのわざは偉大。神をたたえよ。  
すべてを越える神をたたえよ。

角笛を吹いて神をたたえよ。  
琴を弾き、たて琴をかなでて神をたたえよ。  
鼓と舞を合わせて神をたたえよ。  
弦をかなで、笛を吹いて神をたたえよ。

高鳴るシンバルで神をたたえよ。  
鳴りひびくシンバルで神をたたえよ。  
いのちある すべてのもは  
神をたたえよ。

栄光は父と子と聖霊に。  
初めのように 今も いつも 世々に。アーメン。

## 司祭不在のときの主日の集会祭儀

### — ことばの祭儀による式次第 —

#### 開祭<sup>18</sup>

##### 入祭の歌とあいさつ (起立)

**司式者** 父と子と聖霊のみ名によって。  
**一同** アーメン。  
**司式者** 主イエス・キリストの恵みと喜びがわたしたちを力づけてくださいますように。  
**一同** アーメン。

#### 回心

**司式者** 皆さん、主は、わたしたちを集め、心をこめて神のことばに耳を傾けるように招いてくださいました。私たち一同が、兄弟姉妹として心をひとつにして祈り、賛美をささげることができるように、まずわたしたちの罪を認め、心を改めましょう。  
(一同しばらく沈黙のうちに反省する)。

	第一形式		第二形式
<b>司式者</b>	全能の神と、兄弟の皆さんに告白します。わたしは、思い、ことば、行い、怠りによってたびたび罪を犯しました。聖母マリア、すべての天使と聖人、そして兄弟の皆さん、罪深いわたしのために神に祈ってください。	<b>司式者</b>	打ち砕かれた心をいやすために遣わされた主よ、あわれみたまえ。
<b>一同</b>		<b>一同</b>	主よ、あわれみたまえ。
		<b>司式者</b>	罪びとを招くために来られたキリスト、あわれみたまえ。
		<b>一同</b>	キリスト、あわれみたまえ。
		<b>司式者</b>	父の右の座にあってわたしたちのためにとりなしてくださる主よ、あわれみたまえ。
		<b>一同</b>	主よ、あわれみたまえ。

**司式者** 全能の神がわたしたちをあわれみ、罪をゆるし、永遠のいのちに導いてくださいますように。

<sup>18</sup> 先唱者は、①これから始まる祭儀が「感謝の祭儀(ミサ)」ではなく、「司祭不在の集会祭儀」であることを通知し、②小教区担当司祭がどの共同体において「感謝の祭儀」を執り行うかを知らせ、霊的にその共同体と一致するよう一同にすすめ、③その主日を簡単に紹介する(「復活節第二主日」といった典礼暦における位置づけや「召命祈願日」といった特別な意向など)。

立ったり座ったりする合図やお知らせ、聖歌番号などは先唱者が担当し、司式者は祈りの言葉のみを口にするよう役割分担する。

司式者と侍者が荘厳に入堂するような形式は避ける。

司式者は、司祭席や朗読台以外の場所に司式者用の椅子を用意し、その場所で「ことばの祭儀」を司式する。司式者は、会衆と平等な立場にある者として振る舞い、司祭や助祭の動作(手を広げてあいさつしたり、祈ったりすること)はしない。

一同 アーメン。

### 集会祈願<sup>19</sup>

司式者 祈りましょう（一同しばらく沈黙のうちに祈る）

.....

わたしたちの主イエス・キリストによって。

一同 アーメン。

### ことばの典礼<sup>20</sup>

#### 第一朗読（着席）

#### 答唱詩編

#### 第二朗読

#### アレルヤ唱（四旬節には詠唱）（起立）

#### 福音朗読<sup>21</sup>（朗読の後、全員着席し、しばらく沈黙のうちに神のことばを味わう）

#### 勧めのことば<sup>22</sup>

---

<sup>19</sup> 当日のミサの集会祈願を用いることが勧められる。

<sup>20</sup> 当日のミサの朗読箇所が勧められる。事情によっては第一朗読と第二朗読のいずれかを省くことができる。答唱詩編とアレルヤ唱は、朗読箇所に合ったものを選んで歌う。沈黙の祈りをもって代えることもできる。

<sup>21</sup> 朗読者が信徒であれば、「主は皆さんとともに」を省き、「(マタイ) による福音」から始める。

<sup>22</sup> 説教をするのは、司教、司祭、助祭の役割である。司教、司祭、助祭が不在の場合、事前に司祭または助祭とともに集会祭儀準備会をもち、「司祭不在の集会祭儀」参加者が神のことばを心に刻むことができるように打ち合わせをする。以下のようなひとときを過ごす可能性がある。①今日、私たちに語られた「神のことば」を黙想する時間をもつ（例えば、沈黙のうちに各自、福音を読み返し、味わったり、心に響いたことばを書き出したりするように勧める）。②集会祭儀準備会における「福音の分かち合い」での気づきや信仰の喜びを、準備会参加者が「証し」あるいは「勧めのことば」として発表する。③小教区（ブロック）担当司祭が準備した説教を朗読する。④当日の典礼や福音を解説するテキストを朗読する。⑤その場で「福音の分かち合い」をする。ただし「神の啓示を聴き応答する」という典礼本来の目的から逸れないように注意し、「分かち合い」の実りが祈りとなるように配慮する（例えば、「分かち合い」をした各グループの代表が共同祈願の形で祈りを捧げるようにする。「分かち合い」そのものに関する配慮や説明は、『新生の明日を求めて』130-136 頁,226-230 頁参照のこと）。

## 信仰宣言 (起立)

ニケア・コンスタンチノーブル信条	使徒信条	洗礼式の信仰宣言
<p>われは信ず、唯一の神、全能の父、天と地、見ゆるもの、見えざるもの、すべての造り主を。 われは信ず、唯一の主、神の御ひとり子、イエス・キリストを。 主はよろず世のさきに、父より生まれ、神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神。 造られずして生まれ、父と一体なり、すべては主によりて造られたり。 主はわれら人類のため、また、われらの救いのために天よりくだり、聖霊によりて、おとめマリアより御からだを受け、人となりたまえり。 ポンシオ・ピラトのもとにて、われらのために十字架につけられ、苦しみを受け、葬られたまえり。 聖書にありしごとく、三日目によみがえり、天にのぼりて、父の右に座したもう。 主は栄光のうちに再び来たり、生ける人と死せる人とを裁きたもう、主の国は終わることなし。 われは信ず、主なる聖霊、生命の与え主を。 聖霊は父と子とよりいで、父と子とともに拌みあがめられ、また預言者によりて語りたまえり。 われは一、聖、公、使徒継承の教会を信じ、罪のゆるしのためなる唯一の洗礼を認め、死者のよみがえりと、来世の生命とを待ち望む。アーメン。</p>	<p>天地の創造主、全能の、神である父を信じます。父のひとり子、わたしたちの主イエス・キリストを信じます。主は聖霊によって人となり、おとめマリアから生まれ、ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられて死に、葬られ、死者のもとに下り、三日目に復活し、天に上って、全能の、神である父の右の座に着き、生者と死者を裁くために来られます。聖霊を信じ、聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます。アーメン。</p>	<p>天地の創造主、全能の、神である父を信じます。父のひとり子、おとめマリアから生まれ、苦しみを受けて葬られ、死者のうちから復活して、父の右におられる主イエス・キリストを信じます。聖霊を信じ、聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます。</p>

## 共同祈願<sup>23</sup>

### 交わりの儀<sup>24</sup>

#### 主の祈り (次のようなことばで一同を「主の祈り」に招く)

- 司式者** 神のことばで養われたわたしたちは、今、主の食卓にあずかるよう招かれています。主のからだをいただく前に心を合わせて主の祈りを唱えましょう。
- 一同** 天におられるわたしたちの父よ、み名が聖とされますように。み国が来ますように。みこころが天に行われるとおりに地にも行われますように。わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします。わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください。
- 司式者** いつくしみ深い父よ、すべての悪からわたしたちを救い、キリストの平和をお与えください。
- 一同** アーメン。

<sup>23</sup> 共同祈願の意向：①教会とその使命のため、②全世界の救いと国政に携わる人のため、③困難に苦しむ人のため、④自分たちの共同体のためなど。教区長の出した教区全体のための意向、司祭召命のための意向も加える。当日の『聖書と典礼』共同祈願例文を使用することもできる。

<sup>24</sup> 奉仕者は、手を洗い、祭壇の上にコルポラーレを広げる。聖櫃を開けて一礼し、聖体の器を取り出し、祭壇の上に置く。ふたをとり、聖体に対して深く礼をする。

## 平和のあいさつ<sup>25</sup>

**司式者** 互いに平和のあいさつを交わしましょう。

## 拝領前の信仰告白<sup>26</sup>

第一形式	第二形式
<b>司式者</b> 神の小羊の食卓に招かれた者は幸い。 <b>一同</b> 主よ、あなたは神の子キリスト、永遠のいのちの糧、あなたをおいてだれのところに行きましょう。	<b>司式者</b> 信仰のうちにキリストのからだを受けましょう。 <b>一同</b> 主よ、わたしは いたらぬ者です。一言でもいただければ、わたしの心はいやされます。

## 拝領<sup>27</sup>

**聖体奉仕者** キリストのからだ。

**拝領者** アーメン。

## 感謝の祈り<sup>28</sup>（ザカリアの歌、マリアの歌など）

## 拝領祈願<sup>29</sup>

<sup>25</sup> ここで平和のあいさつを交わすこともできる。一同は「主の平和」と言いながら相互にあいさつをする。

<sup>26</sup> 司式者は深く礼をしてから、パテナを添えてパンを捧持し、一同に示して言う。

<sup>27</sup> ① 拝領前の信仰告白の後、拝領の歌が始まる。拝領者は行列をつくる。

② 聖体奉仕者は拝領者一人ひとりにパンを示しながら「キリストのからだ」ということによって信仰告白を求める。信者は明確に「アーメン」と答えることで、キリストのからだを拝領することによってますますキリストのからだとなる決意を表明する。聖体奉仕者は、拝領者が「アーメン」と答えたのを確認してから授ける。

③ カトリック教会の洗礼を受けていない人や初聖体前の子どもが並んでいる場合、聖体奉仕者は、祝福をともに祈ることができる。例えば、聖体容器を持っていない方の手を自分の胸にあて、軽く頭を下げつつ「キリストの祝福がありますように」と祈る。

④ 聖体奉仕者は、一同に聖体を授け、最後に司式者または他の聖体奉仕者から拝領する。

⑤ 拝領後、パンの小片が残っている場合は、ていねいにそれを集めて聖体容器に入れるか、用意された器の水に浮かせて飲み、プリフィカトリウムでふく。

⑥ 聖体奉仕者は、残りのパンを聖櫃に納め、深く礼をしてから扉を閉じる。その後、着席して一同とともにしばらく沈黙のうちに祈る。

<sup>28</sup> 拝領後の短い黙想の後、集会祭儀司式者は、他の信者ととともに祭壇の方に向かって立ち、神の栄光といつくしみをたたえるために「福音の歌」を歌う（午前なら典礼聖歌 83「神をほめたたえよ」、午後なら典礼聖歌 178「わたしは神をあがめ」など）。詩編を歌うこともできる（典礼聖歌 22, 27, 29, 50, 109, 135, 142, 172, 174 など）。

<sup>29</sup> 司式者はたとえば次のようなことばで一同を祈りに招く。祈願は当日のミサの拝領祈願を用いることが勧められる。ただし当日の拝領祈願の中にミサ固有の表現が含まれている場合（例

**司式者** 秘跡の恵みを感謝して祈りましょう（一同しばらく沈黙のうちに祈る）

.....

わたしたちの主イエス・キリストによって。

**一同** アーメン。

## 閉祭

**お知らせ**（着席）

**結びの祈り**<sup>30</sup>（起立）

**司式者** 全能の神、父と子と聖霊がわたしたちを祝福し、すべての悪から守り、永遠のいのちに導いてくださいますように。

**一同** アーメン。

**司式者** 賛美と感謝のうちに。

**一同** アーメン。

## 結びの歌

### 司祭不在のときの主日の集会祭儀指針<sup>31</sup>

「司祭不在のときの主日の集会祭儀指針」は、それぞれ異なるとはいえ、一点に集中する種々の問題に対する解答である。その第一は、主日に充実した祭儀がいつでも、どこでも執行できるとは限らない実状が指摘され（2番）、もう一つの要因として、近年、司教協議会がこのような現状に対処する指針を要請してきている事実が挙げられる（7番）。第三に、使徒座が公にした種々の指示や一般指針による使徒座自身の体験と、この問題に取り組んだ色々な国の司教方の体験が挙げられる。本指針はこれらの経験をすべて吸い上げ、このような祭儀の利点を評価すると同時に、その限界をも指摘するものである。

本指針全体の基本的な考え方は、主日のキリスト者の祭儀をもっともふさわしく、また、あらゆる状況のもとで保証することにある。ミサが不可能な場合でも、主日のための集会祭儀にいくつかの重要な要素が見いだされることを指針は認めているが、しかしミサが本来の祭儀で

---

えば、「主の晩さん（主の過越）にあずかったわたしたち」、「一つのパン、一つの杯（主の御からだと御血）をいただいたわたしたち」などは、以下の祈りを用いることが勧められる。

①「恵み豊かな父よ、あなたはわたしたちを、死んで復活されたイエス・キリストの記念にお集めになり、御子のために聖化された主の日を祝うようにしてくださいました。どうかわたしたちを、キリストのことばに従って生きる証し人にしてください。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。」

②「豊かないのちを与えてくださる神よ、福音に強められ、聖体に養われた民の歩みを導いてください。キリストによってもたらされた神の国の幸いを、日々出会う人々とともに味わうことができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。」

<sup>30</sup> 司式者は、一同の上に神の祝福を求め、皆とともに自分自身に十字架のしるしをしながら言う。

<sup>31</sup> 日本カトリック典礼委員会編『カトリック儀式書 ミサ以外のときの聖体拝領と聖体礼拝』（カトリック中央協議会）9～30ページ。

あることに変わりはない。本文書は、感謝の祭儀を伴わない主日の集会を奨励したり、不必要な、あるいは人為的な方法でその便宜をはかったりするものではなく、ただ現実の状況がこのような集会祭儀を執り行うよう促す際（21-22番）に、望ましい方向づけと規制を示そうとするものである。

指針の第一部は、『典礼憲章』106条から出発して、主日の意義について概要を述べる（8番）。

第二部は、ある教区で、司祭不在が通常になっている場合の集会を整えるのに必要な諸条件を取り扱う。この際に、信徒の協力が前提とされる。それは、司牧にたずさわる者が共同体の成員に委託することのできる役割の一例である。指針と実践の見地からすると、この部分は、当文書中、最も重要な部分である。

第三部では、聖体拝領を伴う主日のことばの祭儀の式次第の簡単な解説が記されている。

他の類似の文書と同様、当指針の適応は各司教が行う。その際、自教区の状況を考慮するが、より広範囲にわたる規則の場合は、司教協議会と検討する。

以上述べた状況のもとに置かれた共同体に対して、主日の集会祭儀を確保することが肝要である。その際、これらの集会を典礼暦年の祭儀に組み入れる（36番）とともに、自分たちの司牧者を囲んで感謝の祭儀を祝っている母共同体と、その集会とをつなぐよう（42番）意を用いなければならない。

いずれにせよパウロ六世（21番）ならびにヨハネ・パウロ二世（50番）が指摘されるように、主日の司牧の主眼は、つねに変わることがない。すなわち、主日の司牧の目指すところはキリスト教の伝統に基づいて主の日を祝い、そして生きることなのである。

## 前文

1 キリストの教会は、五十日祭の日以来、聖霊が降臨してから、主の復活の記念として過越の神秘を祝うために、「主の日」と名づけられた日に、ともに集まることを決して欠かさなかった。主日の集会の中で、教会は聖書全体にわたり、キリストについて書かれている事柄を宣言し、また主が来られるまで、その死と復活の記念祭である感謝の祭儀を祝う。

2 しかし、主日の充実した祭儀がつねにできるとは限らない。というのは、「司祭不在その他の重大な理由で、感謝の祭儀に参加することが不可能」な大勢の信者が過去にいたし、今日もいるからである。

3 種々の地方において、最初の福音宣教の後、司教たちは主の日に信者を集め、また信仰行事のかたちで祈りを指導する役目を教話担当者（カテキスタ）に委ねた。それというのも、激増したキリスト信者が多くの地域に、しかもときには遠方に散在して住んでいたため、主日ごとに司祭が彼らのもとを訪れることはできなかったからである。

4 他の地方では、キリスト信者に対する迫害、もしくは宗教の自由に課された厳しい制約のゆえに、主日に集会をもつことが、信者には全く禁じられている。その昔、殉教に至るまで忠実に主日の集会に参加した信者たちがいたと同様、今日でも、たとえ司祭が不在であっても、家庭あるいは小さなグループでともに祈るため万難を排して主の日に集まる信者たちがいる。

5 今日、別な理由から、多くの地方で各小教区は、司祭数の減少に伴い、主日ごとに感謝の祭儀を執り行うことができないでいる。さらに、社会的、経済的状況から、少なからぬ小教区は過疎化に悩んでいる。このため、主日になると、感謝の祭儀が何回も、異なった遠隔の教会で司祭に委任されることが多い。このような事態が牧者不在の小教区にとっても、司祭自身にとっても、つねに望ましいとは言えない。

6 こうした中で、一部の国の教会において、この事態を斟酌（しんしゃく）した司教たちは、主日にでき得る限りふさわしいキリスト教集会が行われ、また、主日のキリスト教的伝統が堅持されることを願って、司祭不在の場合、主日向けの他の祭儀を考案する必要を認めた。

しばしば、特に宣教地において、信徒自身が主日の重要性を意識し、教話担当者や修道者・修道女の助けを借り、神のことばを聴き、ともに祈り、ときには主のとうといからだを受けるために集まっている。

7 以上の事柄をすべて熟慮し、また、聖座の公布した諸文書を考慮した末、典礼省は、各国の司教協議会の願望も受け入れて、主日に関する教義的要素を若干想起し、合わせて、教区内でこのような祭儀を正当化する諸条件を規定し、さらにその祭儀を正しく執り行うための指針を示すことは時宜にかなっていると判断した。

必要があれば、以下に記す規則をさらに詳しく規定し、また各民族の特性と種々の状況に適応させるのは、司教協議会の役割である。その場合、使徒座に報告する。

## I 主日とその聖化

8 「教会は、キリストの復活の当日にさかのぼる使徒伝承により、死と復活の秘義を八日目ごとに祝う。その日は、それゆえにこそ、主の日、または主日と呼ばれている。」

9 新約聖書の時代にすでに「主の日」と呼んだ特定の日、信者が開いていた集会についての証言は、非常に早い一世紀と二世紀の資料にはっきり見いだされる。中でも、聖ユスチノの次の記述はひときわ光彩を放っている。「太陽の日と呼ばれる日には、街々村々の全住民が一箇所にともに集まっています・・・。」しかし、キリスト信者が集まる日は、ギリシアとローマの暦の祝祭日とは異なっていたので、その日は同郷人にとってもキリスト者であることのあかしであった。

10 最初の時代から、司牧にたずさわる人々は、主の日に集まる必要をつねに説いてやまなかった。「キリストのからだの肢体であるのに、一緒に集まらないことによって、教会から自分を引き離すことのないように・・・。どうしてもよいことだと考えて、集まるのをおろそかにすることがないように、救い主をその肢体から疎外したり、そのからだを引き裂くか、ばらばらにしたりすることがないように・・・。」これは最近、第二バチカン公会議が次のことばで想起させたことと同じである。「この日、キリスト信者は、一つに集まらなければならない。そして神のことばを聴き、感謝の祭儀に参加して、主イエスの受難と復活と栄光を記念し、『死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望へとわたしたちを新たに生まれさせてくださった』(I ペトロ 1. 3) 神に感謝をささげるのである。」

11 キリスト信者の生活における主日の祭儀の重要性を、アンチオケの聖イグナチオはこう説いている。「(キリスト者は) もう安息日を祝おうとはしません。かれらは、キリストをとおして、キリストの死のおかげで、わたしたちのいのちも復活した、あの主の日に基づいて生きているのです。」信者のキリスト教的感覚は、昔も今も、つねに主の日を非常に大切にし、迫害のさなかにあっても、また、キリスト教信仰からかけはなれた、あるいはキリスト教信仰と対立する諸文化の中にあっても、主の日は絶対におろそかにすることはないのである。

12 主日の集会が成立するのに必要な要素として、おもに次の事柄が挙げられる。

- ① 「教会」を表すための信者の集会。これは自発的に形成されるものではなく、神から呼び集められたもの、すなわち有機的に構成された神の民であって、頭であるキリストの名代として司祭がこれを主宰する。
- ② 聖書に基づく過越秘義の教話。これは司祭あるいは助祭によって宣言され、解説される。
- ③ 感謝の奉獻の祭儀。これはキリストに結ばれた司祭によって執り行われ、司祭はキリスト信者の民の名でこれをささげる。これをとおして死と復活の過越秘義が現在のものとなる。

13 司牧的熱誠は、特にミサの奉獻を主日ごとにささげることに向けられなければならない。

それは、ミサの奉献をとおしてのみ、主の過越が永続化され、教会が完全に現されるからである。「主日は、信者の信仰心に明示され、また、強調されなければならない根元の祝日である。したがって、他の祭儀は、きわめて重要なものでない限り主日に優先させてはならない。それは、この日こそ全典礼暦年の基礎であり、中核だからである。」

14 以上に述べた諸原則は、キリスト者の養成の最初から強調されなければならない。その目的は、信者が進んで主日を聖とする務めを果たすようになり、また、主日の都度、教会から招かれて一つに集まるのは、ただ個人的な信心を満足させるためでなく、感謝の祭儀を行うためである、という真の動機をわきまえることにある。こうして、信者はただ休日としてではなく、人間の労働に対する神の超越性のしるしとして主日を体験し、そのうえ、特に主日の集会の意義をもっと深くとらえ、そして教会の成員であることを外的に示すことができる。

15 信者は、キリスト者の共同体生活として主日の集会の中で行動参加を体験するとともに、真の兄弟愛と聖霊の導きのもとに霊的に強められる機会を見いだせるようでなければならない。こうして、孤独の苦悩より解放が得られ、しかも、自分たちの宗教的憧れにもっと完全な満足が与えられると約束する諸宗派の魅力から、より容易に守られるであろう。

16 終わりに、司牧活動は「主の日を喜びの日、休息の日ともする」ための創意工夫を奨励しなければならない。このようにして、現代社会の中で、主の日がすべての人の目に自由の象徴（しるし）と映じ、人間自身の善益のために設けられた日であることが明白とならねばならないのである。まぎれもなく、この人格の善は、仕事とか生産過程とかにまさる価値を有している。

17 神のことは、感謝の典礼、そして祭司的奉仕の務めの三つは、主がその花嫁である教会に提供してくださる賜物なのである。これらは、神の恵みとして歓迎すべきことであり、そのうえ祈り求めるべきことである。特に、主日の集いにこれらの賜物を味わう教会は、「玉座の前と小羊の前に立つ」主の日の完全な享受を待望しながら、その集会で神に感謝をささげるのである。

## II 司祭不在のときの主日の集会祭儀の諸条件

18 主日のミサをささげることができない地域でまず検討すべきことは、信者が近郊の教会に行き、そこで感謝の祭儀にあずかれるかどうかである。この解決法は、できる限り維持すべきである。この場合、信者は主日の充実した集会の意味について教えられ、また、新しい事態に適応するよう導かれる必要がある。

19 主日には、たとえミサがささげられなくとも、さまざまのかたちの集会祭儀に集まる信者に対して、聖書と教会の祈願の宝庫を広く開くことが望ましい。それは、この人々が一年を通じてミサ中に朗読される神のことは、と、典礼季節の種々の祈願の恩恵から除外されないためである。

20 ミサをささげられない場合のために、典礼の伝統が提供しているいろいろな祭儀のうちでも、特に勧められるものに、ことばの祭儀が挙げられる。これには、適宜、聖体による交わりを加えることができる。こうしてキリスト信者は、神のことはとキリストのとうといからだの双方で同時に養われることができるのである。「なぜなら、神のことはに耳を傾けることによって、信者は、朗読をとおして宣言される神の数々の驚くべきわざが死と復活の神秘で頂点に達すること、ミサの中でその記念が秘跡として祝われること、聖体による交わりをとおしてそれにあずかることを知るからである。」

さらに、ある事情のもとでは、適宜、主日の集会祭儀と他の秘跡の執行を合わせ、また特に、それぞれの共同体の必要に応じて、ある種の準秘跡を合わせることもできる。

21 これらの集会祭儀は補助的性格をもつものであって、それが新しい難局を乗り切るための最良の解決であるとか、あるいは便利さへの一種の譲歩であると思なすことはできないことを、信者は、明白に認識しなければならない。ミサがその主日にささげられたか、あるいはささげられることになっている場所で、もしくは前晩にささげられた場所で、このような集いや集会祭儀を繰り返すことは適当ではない。

22 以上述べた集会と感謝の祭儀とを混同することがないように、細心の注意を払うべきである。集会祭儀は、感謝の祭儀にあずかる願望を信者のうちに絶やすどころか、むしろ、強めるとともに、感謝の祭儀によりよくあずかるよう、信者を促すものでなければならない。

23 信者には、司祭なくしては感謝の奉献をささげることが不可能であること、また、これらの集会で受けることのできる聖体がミサの奉献に密接に結ばれていることを伝えていかなければならない。このことから、「神がその秘義の分配者を増やし、彼らをご自分の愛に堅く踏みとどまるものとしてください」と神に祈り求めることがどれほど必要であるかを、信者に示すことができる。

24 司祭評議会の意見を打診したうえで、自教区内に感謝の祭儀を伴わない主日の集会祭儀を定期的に導入すべきか否かを決定すること、さらに、関係する場所や人々のことを考慮したうえで、その集会祭儀のための一般規則と個別の規則を定めることは、教区長の任務である。

したがって、司教の招集と主任司祭の牧者としての役務のもとにのみ、このような集会を開くものとする。

25 「キリスト者の共同体は、最も尊い感謝の祭儀に根をおろし、それを中心としない限り、決して建設することはできない。」それゆえ、司教は感謝の祭儀を伴わない集会祭儀の導入を決めるに先立って、諸小教区の実状を調査する（5番参照）ほか、修道者も含め、直接司牧に従事していない司祭たちに協力を要請できるかどうかを検討し、さらに、それぞれの聖堂と小教区におけるミサの参加の実態を調査しなければならない。

特に主日には、あらゆる司牧活動のうち、感謝の祭儀を今後とも優先させなければならない。

26 司教は自身で、あるいは他の人々を介して適切な教話を行い、教区共同体に今回の措置を要請したいきさつを説明し、ことの重大性を指摘するとともに、共同責任と協力を呼びかける。司教は、集会祭儀が正しく行われるように、一名の代理者を立てるか、もしくは特別委員会を設置する。集会祭儀を推進する人々を選び、彼ら自身が適切に養成されるように配慮する。しかしながら、これらの信徒が一年を通じて、何回か感謝の祭儀にあずかれるようにつねに意を用いる。

27 管轄地域内における集会祭儀の適合性について、司教に情報を提供し、集会祭儀のために信徒を養成すること、時々彼らを週日訪ねること、彼らのために適時、秘跡、とりわけゆるしの秘跡を執り行うことは主任司祭の務めである。このようにして共同体は、主の日に自分たちが「司祭なしに」ではなく、ただ「司祭不在のときに」、よりの確には、「司祭を待ちながら」集まっていることを実感できるに相違ない。

28 主任司祭は、ミサをささげることができない場合でも、聖体による交わりができるように配慮する。さらに、定められた時には、共同体ごとに感謝の祭儀が行われるように意を用いる。聖別されたパンはたびたび変え、また安全な場所に保存する。

29 主日の集会祭儀の司式は、司祭の第一の協力者である助祭に依頼する。祈りを司会すること、福音を宣言し、説教をすること、聖体を授けることは、神の民を牧し、成長させるために叙階された助祭の務めなのである。

30 司祭と助祭のいずれも不在の場合、主任司祭は、主日の祭儀の世話をする信徒、すなわち祈りを指導し、ことばの祭儀を司式し、聖体を配る信徒を任命する。

主任司祭は、まず最初に祭壇と神のことばの奉仕に選任されている教会奉仕者と宣教奉仕者を立てる。彼らも不在ならば、他の男女の信徒を指名することができる。彼らがこの任務を遂行できるのは、洗礼と堅信の秘跡の恵みによるものである。彼らを選ぶ際には、この人々の生活態度が福音的な生き方に適っていること、また信者から好感をもって迎えらるる人物である点に留意する。その指名は、ふつう、一定期間のために限定し、さらに共同体に公表する。何らかの儀式の中で、この人々のために特別な祈りを行うことが望ましい。

主任司祭は、これらの信徒に対して絶えず適切な養成を施し、また、彼らとともに品格のある祭儀を準備するように心がける（第三章参照）。

31 指名を受けた信徒は、ゆだねられた任務が名誉であるよりは、むしろ、使命であること、何よりもまず、主任司祭の権威のもとで行う、兄弟への奉仕であることを自覚しなければならない。その任務は、本来彼らに属するものではなく、「役務者が不在のため、教会が必要とする場合に」果たす、補助的なものなのである。

「各自は自己に属することのみを、そしてそのすべてを行わなければならない。」信徒は自分にゆだねられた役割をこの偉大な奉仕にふさわしい、また、神の民が当然期待している誠実な信仰心と秩序をもって果たさなければならない。

32 主の日に聖体拝領を伴う神のことばの祭儀を行うことができない場合、信者に大いに勧められることは「個人的に、または家族ぐるみで、あるいは機会があれば何家族かいっしょに集まって、適当なひととき」を祈りに当てることである。この際に、テレビやラジオ番組のミサなどが役に立ち得る。

33 「教会の祈り」の一部分、たとえば、その主日の聖書朗読箇所を組み入れることのできる「朝の祈り」や「晩の祈り」を用いる可能性を特に考慮に入れるとよい。それは「信者が『教会の祈り』のために呼ばれ、一つに集まって、心と声を合わせるとき、キリストの神秘を祝う教会を現す」からである。この祭儀の終わりに、聖体を授けることができる（46 番参照）。

34 「迫害や司祭不足の理由から、短期間あるいは長期間、聖なる感謝の祭儀に参加できないでいる個々の信者あるいは共同体に救い主の恵みが欠けることは決してない。事実、彼らは秘跡にあずかりたいとの希望で内的に生かされており、さらに祈りにおいて全教会と一つに結ばれて神に哀願し、また自分たちの心を神に上げているのである。

彼らは聖霊の力強い働きによって、キリストの生けるからだである教会ならびに霊ご自身との交わりにあずかっており、秘跡の実りにもあずかっているのである。」

### Ⅲ ミサがないときの主日の集会祭儀

35 ミサのない場合の主日の集会祭儀は、神のことばの祭儀と聖体拝領の二部から成る式次第に従う。ミサに固有な要素、とりわけ供え物の奉納と奉献文は、この祭儀の中に挿入してはならない。集会祭儀の儀式は、もっぱら祈りを助けることと、単なる集会ではなく、典礼集会の様相を現すことを目的としている。

36 各主日または祭日の祈願文と朗読箇所は、ふつう、『ミサ典礼書』と『朗読聖書』からとる。このようにして信者は教会の他の共同体との交わりの中で、典礼暦年の流れに沿って祈り、そして神のことばを聴くことになるのである。

37 主任司祭は、指名された信徒といっしょに集会祭儀を準備する際、参加者の人数と集会祭儀を実施する人の力量とを念頭に置くとともに、歌や楽奏に用いる楽器のことも考慮する。

38 助祭が集会祭儀を司式する場合には、役務者として要求されているとおりの仕方であいさ

つ、祈願、福音朗読と説教、聖体の分配、祝福を伴う参加者の解散を行う。助祭は自分の職務を表す服装、すなわち白衣とストラ、そして適当であればダルマチカを着用し、座長の席を用いる。

39 集会祭儀で会衆を指導する信徒は、会衆と平等な立場にある者として振る舞う。それは、叙階された役務者が不在のときの「教会の祈り」や信徒が奉仕者をつとめる場合の祝福（「賛美と感謝のうちに」）におけるのと同様である。また、司祭や助祭に保留されている言いまわしを用いてはならず、明らかにミサを直接連想させる儀式、例えばあいさつ、特に「主は皆さんとともに」や、司会者の信徒が、役務者と混同されるような派遣のことは省く。

40 服装は、この奉仕にふさわしいものを着用するか、あるいは司教によって定められた式服がある場合にはこれを着用する。司式者用の座席は用いず、司祭席（内陣）の外に別な椅子を用意する。祭壇は奉献と過越の宴の食卓であるから、聖体の分配に先立って聖別されたパンを置くためにのみ用いる。

祭儀を準備する際には、朗読や歌などのために、適切な役割分担を定め、また場所の配置や装飾に意を用いる。

41 集会祭儀の枠組みは以下の要素から構成される。

- ① 開祭—信者が集まる時に共同体を形成すること、祭儀にふさわしい心構えをつくることを目的とする。
- ② ことばの典礼—この中で神はご自分の民に救いの秘義を啓示するために民に語りかけ、民は信仰宣言と共同祈願でこれに応答する。
- ③ 感謝—神はその偉大な栄光のゆえに祝福される（45 番参照）。
- ④ 交わりの儀—キリストと兄弟たち、とりわけ、同じ日に感謝の奉献にあずかった兄弟たちとの交わりが表され、実現していく。
- ⑤ 閉祭—典礼とキリスト教生活との間の関係が示される。

司教協議会あるいは教区長自身、場所と人々の状況を考慮し、全国典礼委員会もしくは教区典礼委員会の発行する資料によって集会祭儀そのものを、より詳細に規定することができる。

ただし、祭儀の枠組みは、必要なしに変更してはならない。

42 司会者は、冒頭のすすめの中、あるいは祭儀の他の箇所での主任司祭がどの共同体において感謝の祭儀を執り行うかを信者に知らせ、霊的にその共同体と一致するよう信者にすすめるなければならない。

43 参加者が神のことばを心に刻むことができるように朗読の説明を加えるか、もしくは聴いたことを黙想できるように、聖なる沈黙の間を置くようにする。説教は、司祭または助祭に保留されていることであるから、集会で読み上げるために、主任司祭は自ら準備した説教を、前もってグループの司会者に渡しておくことが望ましい。ただし、この点に関する司教協議会の規定に従う。

44 共同祈願は、定められた四つの意向で行うべきである。なお、教区長の出した教区全体のための意向があれば、省略してはならない。また、司祭召命のため、教区長のため、主任司祭のための意向を頻繁に唱える。

45 感謝は次のいずれかの方法でささげる。

- ① 共同祈願の後、あるいは聖体を授け終わった後、司会者は信者が神の栄光といつくしみを賛えるために感謝をささげるよう、全会衆を招く。この感謝は詩編で表す（例えば詩編 100、113、135、147、150）か、または賛歌や福音の歌（例えば「栄光の賛歌」「マリアの歌」・・・）で表すことができる。そのために連願を唱えることもできる。この場合、司会者は信者ととともに立ち、祭壇の方に向かっていっしょに唱える。

② 「主の祈り」を唱える前に、司会者は聖ひつまたは聖体の置かれた所に近づき、一礼してから聖体容器を取り出して祭壇の上に置く。続いて信者ととも祭壇の前で、賛歌、詩編または連願を歌うか、唱えるかする。この場合、これらは聖体のうちに現存されるキリストに向けたものとなる。

なお、この感謝の祈りは奉献文の形を決して取ってはならない。混同をきたさないために、『ローマ・ミサ典礼書』に記載されている叙唱と奉献文の式文は使用しない。

46 交わりの儀は、カトリック儀式書の「ミサ以外のときの聖体拝領」の式次第で述べられているとおりに行う。ミサ以外で聖体を受ける時でも、ミサの感謝の奉献と一つに結ばれているものであることを、たびたび信者に思い起こさせなければならない。

47 聖体による交わりのためには、できるなら、同じ日に別な場所でささげられたミサ中で聖別され、助祭あるいは信徒によってピクシス（蓋付き器、またはテカ）に入れて集会祭儀の始まる前に聖ひつにあらかじめ安置されたパンを用いる。その場所で最後にささげられ、ミサの間に聖別されたパンを用いることもできる。司会者は「主の祈り」を始める前に、聖ひつまたは聖体の安置された場所に行き、主のとうといからだをおさめた容器を取って祭壇上に置き、ここで感謝をささげる場合（45番）を別として、「主の祈り」の導入部を唱える。

48 聖体拝領の行われなくても、「主の祈り」は必ず全員で唱えるか歌うかする。平和のあいさつを入れることもできる。聖体を授け終わってから、「適当であれば、しばらく聖なる沈黙の間をおくか、詩編または賛歌を歌うことができる。」なお、前記45番①に述べた感謝をささげることもできる。

49 集会を解散する前に、小教区または教区の生活に関連のある「お知らせ」をする。

50 「キリスト者個人と共同体の生活の源泉として、さらにまた御子イエス・キリストにおいて万人を集めるという神のみ心のあかしとして、主日の集会がもつ最高の重要性を評価し尽くすことは決してできないであろう。すべてのキリスト者は、聖体のパンで養われることなしに己が信仰を生きることも、教会全体の使命にその人なりに参与することもできないことを自覚しなければならない。同様に確信すべきことは、主日の集会が世界にとって感謝の祭儀という交わりの神秘のしるしだということである。」

典礼省によって起草された本方針を、教皇ヨハネ・パウロ二世は、一九八八年五月二一日で認可し、承認し、発行を命じられた。

一九八八年六月二日キリストの聖体の祭日

典礼省にて

長官 パウロ・アウグスチノ・マイヤー枢機卿

秘書 ヴェルジリオ・ノエー ヴァンカリア名義大司教

(注は省略)

## あとがき

この「司祭不在のときの主日の集会祭儀 『教会の祈り』による式次第・ことばの祭儀による式次第」(試用版)は、日本カトリック典礼委員会編『カトリック儀式書 ミサ以外のときの聖体拝領と聖体礼拝』(カトリック中央協議会)と典礼司教委員会編『教会の祈り』(カトリック中央協議会)に準拠しつつ、カトリック浦和教区「司祭不在の主日の集会祭儀 規範版(1998年)」を手本として大阪教区司祭評議会が作成したものです。

なお本書には、上記以外にも、典礼司教委員会編『ローマ・ミサ典礼書の総則』(カトリック

中央協議会)、典礼聖歌編集部編『典礼聖歌』(あかし書房)、新生計画実施要領作成委員会編『「新生」の明日を求めて』(カトリック大阪大司教区)からの引用あるいは参考箇所を含んでいることも合わせてお断りいたします。

司祭不在のときの主日の集会祭儀  
『教会の祈り』による式次第  
ことばの祭儀による式次第  
(試用版)

2002年3月31日発行

編者 カトリック大阪大司教区司祭評議会

発行所 カトリック大阪大司教区  
〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22  
TEL 06-6941-9700

印刷所 有限会社 東光印刷

(非売品)